
神威

猫と日だまり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神威

【Nコード】

N7206K

【作者名】

猫と日だまり

【あらすじ】

どこにでもいる女子高生だった清白葉月^{せいびはづき}。しかし、彼女を必要とする精霊達に喚ばれる形で異世界へと来てしまう。

この物語は百合百合な成分を含んだり含まなかったりします。この物語は主人公最強(?)な物語です。

だからどうした!とか、むしろ好物!と言える紳士と淑女な方々はどうぞご覧下さい。

以上の成分が苦手な方は読むのは控えた方が良くもしくれません。

飛びます。(前書き)

初投稿なので色々拙いですが、どうか暖かい目で見てくださいm
—) m

飛びます。

「お疲れ様でしたっ!!」

「お疲れ様でした!」

二十人程いる門下生達が道場から出て行ったのを確認すると、はあ…と人知れず溜め息をつく。

これからが自分の番だ。門下生の前で自分の練習が出来ないのはなかなか歯がゆいものがある。

ゆっくりと足を開き、矢を取る。矢羽の状態を確かめてから弓に合わせて、息を吐く。弦を引き絞り、確かめるように肩を少しずつ動かしてゆく。そして、訪れる”無”。

葉月はこの精神統一の間が一番好きなのだ。”無”…頭の中も、周りの音も、そして自分自身ですら”無”に思えてしまうほどに弓的だけに集中する。

ダンツという音と共に矢が30m先の的に当たる。

それを8回繰り返したところで「ふう」と一息ついた。

4本は一番中心の円の中に、残り4本はその周りの円の中に刺さっているのを確認すると、「まあこんなものかな」とひとりごちながら矢の回収に行く。

弓道というものは、一回一回にとつもない集中力と体力を使う。

8本連続で本気で矢を射るのはなかなか大変なものなのだ。

「あつ、ヤバい…もうこんな時間!」

矢を回収し終えた葉月だったが、既に時刻は7時を過ぎている。

今日は日曜なのであまり遅くまでやると体力的に明日の学校が保たないことは今までで嫌と言うほど体験している葉月は、素早く道

具を片付けて帰路についた。

葉月の実家の清白家は古くから弓道の道場を開いており、今の師範代は清白葉月である。高校3年で既に師範代になっている葉月はその非凡な才能を遺憾なく発揮し、立派な先生となっている。

とは言つものの、勿論平日には学校に行っている葉月の代わりに門下生達に弓道を教えているのは、今年53になる師範代の橋本一郎である。

一郎は清白家との血縁は無いがその卓越した弓道の才能と、物腰の柔らかさから人気の先生である。

今でこそ葉月に負けるが、それ以上に経験豊富な一郎は葉月の師匠とも言える存在だ。

そして一郎は、葉月にとってみれば信頼の置ける人物の一人である。

葉月が自宅に帰ると、一郎が丁度訪ねて来るところだったらしく、玄関の前で顔を合わせた。

「一郎おじさん！久しぶりっ！」

「おお、葉月！今帰りか。」

屈託の無い笑みで一郎が尋ねる。

「うん、道場で指導と自主練。」

「頑張るなあ。」

うんうんと頷く一郎は、あっと思いついたように言う。

「どしたの？」

「ああ、いやな、葉月に聞きたいことがあってさ」

「あたしに？」

「そう。そのために今日ここに来たんだしね。」はて、何か怒られるような事をした記憶は無いのだけれど……と思いつつも一郎の声を聞く。それほどに一郎から何か聞かれると言つことは珍しいのだ。

「お前さん妖精って知ってるか？」

「え……？」

流石に突拍子も無い事を真顔で言われ、頭が追いつかない葉月は
たまらず間拔けな声を漏らした。

「ほら、あのティンカー ルみたいなのさ。」

「ああ、そういうこと。うん、まあピーター ンなんて何年も前に
絵本で見ただけだからあんま知らないかなあ。」

「いや、絵本じゃなくてだな…現実には、さ。」

「ええ？居るわけ無いじゃんそんなの…」

あははと笑いながら言ってみたが、一郎はいたく真面目な顔のま
まだ。

「それがな、居たんだ。見間違いない。流石にこの年でポケた
りはせんよ。そいつはな、葉月。お前さんが欲しいって言ってきた
んだ。」

「……はあ。それがどうかしたの？」

「つまりだ…いつか妖精と会う筈なんだ。俺の勘が正しければ、そ
れは面白い事になる。下手をすりゃ命は無いだろうけどな。だから、
安全そうならその妖精に付き合ってみな。」

「え…あ…はい。」

「よし！」

そう言っただけでガハハと笑う一郎に啞然としながらも、ふと違和感に
気付く。と言うのも、目の前が屋気楼の用にゆらゆらと揺らめいて
見えるのだ。

ブンッ…

「……………えっ？」

一郎おじさんならこんな良く分からない冗談なんか言わないと分
かっているからこそ、益々意味が分からなくなってきた考え込んで
いた葉月は、ただただ驚いていた。

そこには、目の前に居たはずの一郎が居なくなり、代わりに広い草原が広がっていたのだ。

飛びます。(後書き)

投稿のやり方が難しいorz

徐々に慣れていききたいと思えますー…

誤字とかここおかしくね?とかあったら教えてくれると狂喜乱舞しながら泣いて再編します…

確認します。

「ここ・・・どこ？」

草原の真ん中に立っている葉月の周りには、葉月の肩辺りまで伸びた草が生い茂っていた。

草以外は見当たらず、せいぜい見えるのは太陽が傾いている方にある小さな小屋だけだ。

「あっちって・・・西？取り敢えず行かなきゃどうしようもないよね・・・」

あまり気の乗らない葉月だったが、この非常時にわがままは言ってもらえない。重い足取りで小屋へと向かった。距離としては20分ほど歩いただけだったのでそれほど遠くはないのだが、色々考えた状況でこの距離は意外ときついものがある。

小屋の前に着く頃には、既に辺りは真っ暗になっていた。小屋は二階建てながらも小さく、扉も少し頭が当たりそうなほどに低いものだった。しばらく扉の前で迷っていた葉月だったが、よし、と息をつく。

「ごめんくださーい！」

「はい」

びくつ、と声が返ってきたことに安心しつつも驚き、いまさらながら後悔する。

なにせ、返ってきた声は少し野太く、明らかに大きな男のものだったからだ。しかし、いまさらどうこうするわけにもいかずに覚悟を決める。

「ちよつとお尋ねしたいことがあるんですけどー！」

「ああ、少しお待ちください。今開けます。」

中からガチャ・・・という音が響き、扉が開く。

果たしてそこに居たのは、葉月よりも頭ひとつ小さいものの、筋肉質の青年だった。しかもその身は甲冑で包まれていて、いかにも兵士をやってますと言っているような格好だった。ついでに剣も持っている。

「どうかされましたか？」

「ふえ・・・っ?」

「はい?」

唾然としているところに突然話しかけられてつい変な声で返事をしてしまった葉月だったが、取り敢えず疑問に思ったことを聞く。

「ああ、大丈夫です。ええと・・・ここどこですか?」

「え・・・ご存じないのですか!?!」

「はあ、まあ。」

何処かのゼントラディー人のような返しをされて面食らっていると、青年は呆れたように話してくれた。

「ここは英雄の草原。幻視の巫女が聖域として立入禁止にした場所です。まさか、貴女はここに入ったのですか!?!」

「え・・・まあ、はい。というか、いつの間にかその真ん中に立つてたというだけで実際のところはよく分からないんですけど・・・」

「
」

呆れたと思つたら憤怒し、そのあとには啞然とした表情を見せる青年は悪い人には見えないけれど真面目なんだろうな。とどうでもいいことを考えていると、不意に青年が膝をつき右手を左胸にあてる（葉月の中では）騎士の礼をし、恭しく語った。

「失礼しましたっ!!」

「……へ？」

「まさか貴女ほどの方がこのような場所で私めとお話下さるとは考えても居なかつた事でつい失礼な態度を取つてしまいました。どうかご無礼をお許しください。」

「へっ? いや、別に私そんなに……」

「いえ、此度は私の不手際、お許し頂けない事であればこの私の命をもつて償いさせていただきます!!」

「いや、ちよっ! 待つてつて!!」

いきなり恭しい態度で語られて、まるで葉月のせいで自害するみたいなことを言われてはこの状況に納得いつていない状態が更に悪化する。

「ですが……」

「ですが……じゃない! ここがどこなのか聞いただけなのになんで剣抜いてるのよ!」

「いえ……それは一重に私の不手際で……」

「貴方何もやってないじゃない……」

頭痛くなつてきた……とつぶやきながらも、取り敢えず小屋の中に入れてもらう。小屋の中は以外と綺麗で、しかし殺風景だった。そこには木製の大きな机と同じく木製の4つの椅子がおいてあり、そのひとつに案内された葉月は、取り敢えず現状把握のために先ほ

どと同じ質問をする。

「んで、ここはどこなの？」

「はい、ここは幻視の巫女が聖域として指定された場所です。」

「・・・幻視の巫女ってのと、聖域って何？」

「ええとですね・・・幻視の巫女とは先代巫女であらせられるスー
トウク様の事で、聖域とはその幻視の巫女が地球の神を召還した際
に神が降臨される場所として指定された所のことです。」

「・・・残念ながら私は神じゃないと思うわ。それに、地球を知っ
ているの？と、言うかここは地球じゃないの！？」

「ええ、地球ではありません。各国の巫女たちは自由に地球に干渉
できるのですが、我々は寝ている間に少し様子を垣間見れるだけだ
すね。」

「はあ・・・ということは何、巫女とやらに会えば帰れるのかしら
？」

一瞬すぐ帰れると思ったが、しかし青年はかぶりを振る。

「巫女が可能なのは”自由な干渉”です。世界の行き来はめったに
出来ません。」

「は・・・？つまり異世界・・・ってこと？」

流石に話のスケールが大きすぎるだろうと思うが、青年はいたっ
て真面目な顔のままだ。

「はい。ここは地球と・・・というより、日本と重なる世界です。
だから、ほら。言葉も同じでしょう？」

「あ・・・うん、確かに。いや・・・うん。何だろう、そうなんだ
ね。そう考えると確かに納得できそう。」

「まあ先ほども申し上げましたとおり、日本に帰るといふことは直

くには出来ませんので、まずはこの世界のことを知ってください。」
そう言われ、なるほどそうだとな納得することにした葉月は、当面この世界で暮らすために必要な知識を聞いた。

青年曰く、この世界は日本に干渉する為の世界であり、星としては地球のように丸い星でサイズは地球の10分の1ほどであり、大きな大陸が二つ南北に分かれて存在すること。その中には7つの国々があり、その国々に巫女が居ること。

巫女とは政治にも大きく参加する人物で、全員がルルイエと呼ばれる宗教組織に属していること。ルルイエのトップの人物には、各国の巫女が敬意を払っていること。今居る場所は、北の水国、アーカムであるということ。この後は取り敢えずアーカムの巫女、ミラーラに会えば、今後どのように過ごせば良いか教えてくれるということ。

「うん、大体分かった。ありがとうね。」

「いえ、かまいません。取り敢えず今日はここでおとまりください。夜は魔物が多くて物騒ですから。」

「うん、そうさせてもらう。ありがとう。」

「いえ。では私を見回りに行ってください。二回の寝室のひとつをお使いください。鍵を閉めておけば結界が張られて家の周りに魔物が寄ってこなくなりますので、安心してお休みください。」

青年はそういいつつ剣を持ち、外に出た。

「流石に色々あって疲れたなあ・・・ってかまだ意味分かんけど・・・」

ひとまず寝てから考えよう。そう割り切って葉月は二階の寝室に

向
か
っ
た。
。

挨拶を交わします。(前書き)

むう・・・

最近大筋の話は出来ても上手く文に出来ないorz

そんなこんなでゆっくり更新でかつ文おかしいですが、楽しんでいただければ幸いです・・・

挨拶を交わします。

ふと目が覚めた葉月が最初に見たのは、自分をまじまじと覗き込む一人の少女だった。幼さの残るその顔は、しかし冷徹な目をしていてそのギャップにビクリとする。

「……………どちら様？」

「この国の巫女……と言えば分かるかしら？」

「……………ここは？」

「あら、貴女は眠りについた場所から動いてないわよ？」

そういう巫女……ミラーラは、フツと笑うとベッドから離れ、扉に背もたれる。

「はじめまして、救世主さん。お名前はなんと云うの？」

「ふえ……………きゆうせいしゅ？」

「ええ、貴女は紛れもなく救世主よ。ああ、あと、どの道貴女はこの世界を救ってくれないと元の世界に帰れないわよ？」

「え……………ちよつとまって……私今寝起きだから頭こんがらがってる……………」

葉月はふらふらと立ち上がると、備え付けの洗面所で顔を洗う。日本のような水道が通っているらしく、冷たく透明な水だった。

葉月は小さい頃からの弓道の練習からか、朝顔を洗うことが日課

となっていて、今では自己暗示と同じ効果でもって頭の中をクリアにしてくれる。

「ふう・・・で、なんですって？」

「ごそごそとタオルを探しながら尋ねると、ミラーラは少し驚いたような呆れたような表情でもって答えた。

「私に背を背けながら話しかける人なんて始めて見たわ。いえ、それが悪いというわけではないのだけれどね。」

そう言いつつ苦笑交じりに自分の持っていたハンカチを葉月に手渡す。

「ありがとう」

「いえ。で、貴女の名前は？」

「私は清白葉月。貴女はミラーラ・・・よね？巫女様の。」

「ええ。で、葉月がこの世界を救ってくれないと、貴女も困るし私も困る。ついでに世界も滅びちゃうって言ったの。」

「うん、把握した。取り敢えず日本語みたいね。」

「あら？そこは既にこの見張りの兵士から聞いたのではなくて？」

「いやあ、そりゃ聞いてるけど・・・私が救世主・・・ってねえ・・・」

頭をぼりぼりと掻きながら答えた葉月。

「第一、私が救わないと帰れないってどんな理屈よ？私は来たくてここに来たわけじゃないのに。」

「今、私たち巫女の力が弱まっているの。」

「・・・それが？」

「亜空間転移をしなきゃ帰れないのだけれど、そんな高度な術は巫女全員の状態が完全でかつ一時間ほど高速詠唱をして始めて可能になるわ。まあ、前巫女のストウク様なら難なくやってしまうのでしようけれど。」

「それは・・・どうして？」

「彼女は特別な能力を持っていたの。異能・・・というべきでしょうか。貴女がここに来てしまったのもストウク様のせいなのでしようけれどね。」

「その巫女さん、今はどうしてるの？」

尋ねてすぐにはしまった！と思った。ミラーラの表情は、とても苦しげに歪んでいたからだ。

「彼女は・・・母は、自分の力を使って、この世界に融けたわ。」

「・・・お母さんだったの。ごめんなさい。けれど、融けた・・・って？」

「気にしないで。母のおかげでまだこの世界が壊れずにいるし、日本・・・地球も壊れずにすんでいるの。」

「つまり・・・どうということなの？」

ミラーラは一度水道の水を机のコップに汲み飲むと、一度深呼吸をしてからこの世界の現状を語った。

曰く、この世界は日本で言う八百万の神々であるということ。神が起こした奇跡と呼ばれる諸現象は、実はこの世界の住民が日本に干渉して起こしていたということ。しかし、今ではこの世界の力が、地球全体の環境破壊により弱まりつつあるということ。

「本当なら、先の世界大戦でこの世界諸共滅びるはずだった。そして、この世界がなくなれば、日本・・・果ては地球全体が危ない。」
「え！？でも、なんで？私はフツウに暮らしてたけど？」
「それを救ったのが・・・母なの。」

スートウクは自身の持つ魔力と、その異能を使って日本に残っている魔力を直接この世界につなぎ、世界を救おうとした。だが、土地に残る魔力をすべて世界に繋ぐとなると、その体では魔力の内包量に無理があり、それを解決するためにスートウクは世界と同化したという。

「うん・・・事情は分かったわ。それで、二つほど質問があるんだけど。」

「なんでも聞いて頂戴。」

「うん。魔力って・・・なに？」

ああ。とかうん。とか言いながら、伝えにくそうに答える。

「貴女の想像しているものと大して変わらないはずよ。ちなみにその力の元となっているのは、生命力・・・みたいなモノかしら。」
「ああ・・・ドラゴン　ールでいう元　玉・・・みたいなのか。」

「・・・ええ、多分そんなもの。他には？」

「ええとね、日本人にとってみれば貴女たちは神様・・・なんだよね？」

「そうねえ・・・厳密に言えば、精霊・・・つてところかしら。人によって感じ方は様々だと思うわ。何か願い事を聞き入れたりするわけではないし、そもそもそんなことできやしないし。」

「成る程・・・さっぱり分からん。けどそれ信じないとどっしりおっ
もなさそっね・・・あ、あと一個質問。」

「はい、どっしり。」

「どっしりやってここに入ったの？鍵してた・・・よね？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・ミッシ／＼／」

挨拶を交わします。(後書き)

ああああああ・・・

作者は今文才のなさに打ちひしがれてますが・・・

今回のとか意味わかんないですよ・・・

まあ、大目に見てくださいww

それっぽいものだと思ってくれれば・・・

質問あればしてください。分かりやすく書き直しますorz

目覚めます。

朝食をとろうという話になり、ミラーラと葉月は小屋の1階に降りた。常駐の青年は見回りらしく、今はここには居ない。

「ねえ、ミラーラ。」

「どうしたの？」

はむはむとパンを頬張っているミラーラを眺めながら、ふと感じたことを聞いてみる。

「この世界の人ってさ、みんな小さいんだね。」

「あー…うん、そうね。この身長でも年齢なら貴女より上の筈よ。」

「ふーん。ミラーラって何歳なの？」

「20よ。」

「なん…だと？」

葉月の年齢は17である。しかし、身長だけ見れば、ミラーラは138cm、葉月は168cmである。その差30cm。

「ほら、私の方がお姉さんのよ。」

少しふんぞり返って語るミラーラが可愛い。

「…ねえ、お姉様。」

「どうしたの？葉月。」

「私、魔法が使いたい。」

「・・・良いわよ。お姉さんになんでも聞きなさい。」

その可愛さにニヤニヤしつつ、葉月は魔法の基礎について学んだ。

どうやら魔術とは風、火、水、土、雷、光、闇、時の8種類に分けられるらしい。

風、火、水は光の仲間、土、雷は闇の仲間、光と闇は時の眷属で、つまりは相性として時の魔法が一番強いと言っことだ。

「木火土金水じゃないのね。」

「？」

「ああ、気にしないで。陰陽師とか好きなのだから。」

「ふうん？」

あまり噛み合っていない会話だが、葉月はやる気満々である。

「どうやって使うの？」

「うむ、そうだな。魔力は大気中にある。それをかき集める感じだな。そして放つ。それが基礎だ。」

いいつつ、ミラーラは体の前に出した手のひらから野球ボールサイズの光る球体を出す。

「もっとも、感覚で慣れるまでは分からんかもしれんがな。」

勝ち誇ったような笑みを浮かべながら葉月を見た。そこで葉月の負けず嫌いが発動する。

内心やってやると思いつつ、集中して魔力を感じようとする。すると、なにか手の中に”在る”ような気がした。

「うーん…こんな感じかな？」

それを集めるイメージをし、放つ。

「・・・は？」

「おお！出来たっ！」

その球体のサイズは、果たして半径1m以上のものだった。

「ちょっとまって・・・今、2秒くらいしかタメなかったよね？なに、このサイズは・・・」

「お姉様、これどう？」

逆に勝ち誇った笑みで質問する葉月に、ミラーラは啞然としながらも返事を返す。

「どう・・・って、カンペキよ。しかも貴女魔力値高いのね・・・たったあれだけの間にこれほどの魔力を集めるなんて、よっぽど魔

力の内包量が多いんだわ。」

ふふん。とても言いたげな表情の葉月は、しかしすぐに真面目な顔になり尋ねる。

「ねえ……これでなにが出来るの？」

ミラーラもすぐ真面目な表情になり答える。

「そうね、これほどの魔力であれば時の魔術も使えるのでは無いかしら。魔術は、魔力を使って想像した事を現実に起こすものなの。例えば……そうね、単純に、時よ止まれ……とかどうかしら？」

「おお、ザ・ワールド！よし、やってみる。」

そう言うつと目を瞑り先ほどと同じように集中し、魔力を感じる。それを体内に入れて放出するイメージで呟く。

「さあ、時よ止まれ！ザ・ワールドッ！！」

とその時、シン……と音が消えた。

「あ……え？」

目を開くと、部屋の中が無色になっていた。

「出来た……」

そう、目の前には本当に固まったように動かないミラーラが居て、しかし窓の外は鳥が飛んでいた。

すると、不意に色が戻り、ミラーラが動き出す。

「今・・・止まってたの？葉月の立ってる場所が違うわよね・・・」

「あー、なる程。止まってた方としては瞬間移動に見える訳だ。」

ミラーラは驚愕の表情で呟く。

「うそ・・・冗談だったのに、本当に時を止めるなんて馬鹿げた力が・・・」

「あー・・・つまりさ、ミラーラ。魔力って属性うんぬん言うけどなんでも有りなんだね。」

そう言つと、ミラーラはキツと葉月を見る。

「そんな訳無いじゃない！人によって特定の属性しか使えない人も居るし、まして時の魔術なんて使える人殆ど居ないのよ！？その中で、時を止めるなんて・・・それはつまり、一定の空間の時を切り離してしまうものなの！そんな・・・次元に干渉するような魔術、普通出来ないわよ！」

つまり・・・

「なんとというチート（笑）」

目覚めます。（後書き）

えー…あとがきで補足をば。

属性は、時がトップ、次いで光と闇、その下に風と火と水、土と雷があります。

光や闇、または時の魔術は、その下に有る属性の魔術が扱える人々が力を合わせて使います。

だから、巫女が全員集まれば時の魔術を使い、次元に干渉して葉月を元の世界（日本）に戻せるのです。

一人で時が使える・・・という事は、つまりその下に有る属性・・・そう、全ての属性が使えるという事なのです。

なんというチートww

しかし、だからと言って葉月一人では日本に帰れる訳ではありません。何故なら、日本は魔術という概念がない（つまり空間転移という事をしない）ため、多世界的な日本の座標（作者は次元座標と呼びます）と言うものが葉月には分かりません。

空間転移には、多世界解釈としての話になりますが、次元座標が必要になるのです。

この場合、世界間の相対座標が次元座標となりますが、それは感覚として、（世界の在り方故）この世界の人々には分かるのですが、日本人の葉月にはさっぱりな訳です。

そして、それは数字として表せるわけでもありません。何故なら、起点（0、0の点）が存在しないからです。まあ、だからこそその相対座標なのですが。

そんな訳で、まだまだ葉月はこの世界に居続けます。

・・・分かりにくいですねorz

まあ、つまり葉月だけじゃ帰れないんです。そこ分かって頂けると
良いなあ・・・と思いつつ。

武器作ってみます。

「さて、元の世界に戻るにしてもこの世界に留まるにしても、取り敢えず一度王都に来て貰いたいのだけど・・・そうね、魔物とかも出るから、せめて自分の身を守る術を学ばないとね。」

取り乱していたからかまだ少し赤い顔のミラーラは、そう言っ
てメガネをかける。赤ぶちの丸いメガネで、少し幼い顔と大人びた目
との相性は抜群だった。

「なんでメガネかけたの？魔術の威力でも上がるの？」

ふと思ったことを尋ねると、ミラーラはそっぽをむいて恥ずかし
げに指を絡ませる。

「だって、カッコいいじゃない・・・」

「か・・・かわいい・・・」

「か・・・可愛いとはなにか！くそう・・・私より背が高いからっ
て！」

「どっどっど。」

「私は馬ではないわっ!」

「いやぁ……ミラーラっていじられキャラよね。」

「……意味は分らんが何となく馬鹿にされている気がする……」

「ほん、とわざとらしい咳をして、ミラーラは続ける。

「と、に、か、く!王都への道のりで面倒に巻き込まれないために何か護身術とか覚えて貰いたいんだけど……何か、使える武器はある?」

「そーねえ、薙刀は好きだけど使える訳じゃないし……やっぱ弓かな?」

「そう、なら作って。」

「……パードウン?」

「勿論魔力で作るのよ?これはイメージして、そのまま手の中に出してみる感じで出来るはずよ?因みに、武器を出している間は常に魔力を消費するわ。必要な時にいつでも出せるようにしておくのがベストね。」

「……イメージするだけ?」

葉月が胡散臭そうな目で尋ねると、ミラーラは当たり前のように頷く。

「貴女ならそれだけで出来るはずよ。」

うーん……と唸ってみるが、ミラーラには何かが現れた様子は伺えない。

「出来ない?」

「いや……なんていうか……出来た……と思う。」

「歯切れ悪いわね。けど、弓なんてどこにも」

言いかけたミラーラを葉月は手の中に作った弓で小突く。

「ほら、ここに。」

「……なにをしたの?」

「いやあ……なんか透明の弓が出来ちゃった……みたいなの?」
「>

「テへ。じゃないわよ!?!なにそれ……ちゃんと使えるの?」

「うん。ちょっと触っただけだけど、普通の弓みたいだよ？ところで、矢も自分で作るの？」

「・・・そうね、一応やってみて？」

よし！と力を貯めるイメージをして、矢を作る。

「うん、出来たよ。」

「それも透明とでも言っの？」

葉月の手になにも握られてないが、なにかを握っている感じはする。

「まあ、普通魔力で作った矢は、空気中の魔力が邪魔に絡って使えないことが殆どなの。いくら規格外な貴女でも無理かもね・・・」

「うーん・・・じゃあさ、こう・・・風の加護！とかないの？」

「あるわよ？矢を護るイメージで魔力を組んでみるといいわ。一度、やってみましようか。」

そう言っってミラーラが指さしたのは窓から60mほど先にある木の实だった。

「窓越しに射れる？」

「やってみる。」

矢に力を込めて、早く、速く、疾く飛べー！と念じると、微かに矢の周りに風が生まれた。もし加護が本物なら、いつも通り射たらダメだなあと思った葉月は、正面に獲物を持つてくるように立つ。

「あたってー！」

「そんな上狙いであたる？」

「わかんないけど取り敢えずどんな感じか様子見ワンショット。」

ぶつぶつと答えると、”無”の状態になる。

何も考えず、当てることにのみ集中する。

ゆっくりと構えて、見えない矢を見えない弓にあてがう。

「・・・」

そして、射た。

パーンッ！！

「「え？」」

葉月の放った矢は見事、木の実の真ん中を射抜いた。だが、速すぎる。放った瞬間には木の実は粉々になっていた。

その、まるで銃を使ったかのようなスピードと正確さに、二人とも言葉を失う。

「うん、使えるね・・・」

「そう・・・ね。」

「てかさ、これ・・・生き物に使って大丈夫かな？」

「・・・なあ？」

武器作ってみます。(後書き)

葉「そういえばミラーラ、なんか言葉遣いコロコロ変わるね?」

ミ「仕方ないわ。どうしても巫女としての言葉遣いと普段の言葉遣いとが混ざってしまっの。」

葉「”くじゃ”とか”くか”とかは巫女だからってこと?」

ミ「うん、そうね。だからいつもなら”くわ”とか”くね”とか言うのだし。」

葉「驚いたりすると言葉遣いメチャクチャになるものね。」

ミ「うう・・・恥ずかしい・・・」

葉(か・・・可愛い)

出発します。

葉月の弓の一件の翌朝、ミラーラと葉月は王都へと向かうことになった。

「取り敢えず他の国の巫女達から情報を集めて、日本に帰れるようにしなきゃね。」

よし、と意気込む葉月だが、勿論不安要素もある。むしろ不安要素しかないと言っても良いほどだ。

そもそも、未だに確実に日本に帰れると決まった訳では無い上に、その手掛かりを掴みに行く道中では魔物や盗賊など葉月にとってフアンタジーな不安要素まで絡んで来るのだ。

そして隣に居るのは一国の巫女。盗賊にとっては良いカモである。しかも自分は一切戦闘など出来ない。これでは襲われても文句は言えないような条件ばかり揃っている。

「まあ武器だけは規格外何だけどねえ・・・」

「なにをぶつぶつ言ってるの？」

「読者サービスの現状まとめ。」

「？」

「気にしなくて良いってば。それより、ここからどっち行くの?」

「取り敢えず北東に行くわよ。王都へはちゃんとある程度整備された道が通ってるから、そこまで辿り着ければ今日は良い方よ。」

今まで居た小屋からみて、北東には草原しか見えない。因みに西も草原だ。西は禁止区域になっている場所だったので、どのみち北東か南東しか行ける方向は無いのだが。

「因みに何日位で王都?」

「半月?」

「・・・15日程っすか。」

「そっつすよ。」

葉月は世界の終わりとも言いたげな表情だが、ミラーラは至って真面目な顔で、しかし面白そうに答える。

「うへえ・・・この世界には文明の利器はないのか!」

「無いわねえ・・・精々電気が、灯りをつけてくれる程度かしら?」

「へえ・・・ちゃんとそういったインフラは進んでるんだね。水道

もあつたし。」

「インフラ？」

「こつちの言葉。気にしないで。」

そう、この世界にも電気、水道はある。しかし、ガスは無かった。それは、ガスより効率が良い魔力の熱変換装置が普及しているからだ。

これは単純に魔力と言うエネルギーを媒体にして魔力原子の摩擦を起こして使うもので、武器運用は難しい。勿論電気を起こすような大型装置なら別だが、そんなものは携帯出来ないサイズのため現実的でない。精々大型な大砲を作る事が出来るものだった。因みにこの大砲は、王都に設置されているらしい。

「そいやさ、ミラーラの武器ってなに？」

「私のか？まあ強いて言えばロッド……と言うものかな。魔力増幅用の補助部品のようなものよ。」

「他の巫女さんもおんなじ？」

「いえ、こんなのを使うのは私と雷の巫女だけよ。まあもともと、私含め巫女は皆武器など無くてもそこえらの輩には負けんがな。」

「私と比べるとやっぱり私の方が上？」

「……貴女の場合は規格外なのよ。」

少し拗ねた様子で、上目使いに見られる形の葉月は、正直辛抱た
まらん！状態だが、まだ百合路線へと踏み込む程陶醉している訳で
は無いので頭を撫でるだけに留まる。

「なでなでするなっ！」

「いや、可愛くてつい……」

「はぁ……もういい……好きにして。」

好きにして、と言われて実際好きにするとピーなので、取り敢え
ずニヤニヤしてみる。

「ねえ、ちょっと言って欲しいセリフがあるんだけど……」

「……なによっ？」

明らかに疑っている目で葉月を睨むミラーラだが、今の葉月には
逆効果である。

「あたしそんなにちっちゃくないよっ！って言うてみてww」

「誰が言うか阿呆っ！……」

「ええー・・・メガネかけたミラーラ可愛い！てか小さいミラーラが可愛い！むしろメガネより小さいっ！」

「あたしそんなにちっさくないよっ！」

はっと気付くと、既に葉月は鼻血を出して笑顔で倒れていた。

ミラーラ曰く、そのときの顔は、とても満足げに微笑んでいたという。

出発します。(後書き)

いかん・・・ついworkingなネタを入れてしまった・・・

お約束です。

「そういえば、魔物ってどんなの？」

葉月とミラーラは、王都への道に向かう道をひたすら進んでいた。取り敢えず王都への道には道沿いに宿などが揃っているというからだ。

だが、先程からピリピリとした空気を感ずる。何かがちらを監視しているような感じがするのだ。しかもネチっこい。

「簡単に言ってしまうえば野生の動物の凶暴なバージョン。正確には、大気中の魔力を何らかの形で異常な量吸収してしまって、我を忘れた獣よ。」

ミラーラも気づいているようだが、あくまで平然とした顔である。

「聞けば聞くほど危険な匂いがするねえ・・・」

そんなミラーラの様子に何か対策でもあるのだろうかと考えた葉月は、普通に会話を続けた。

「あら、それでも無いわよ？所詮元は動物なのだし、知能は低いわ。」

ミラーラは口では普通に会話しているが、目では回りをせわしく確認している。明らかに何かあると言っていることだろう。しかも、確実に悪い方で。

「じゃあ何故襲ってくるの?」

流石の葉月も少し緊張感を持ちながらも、魔物という未知の敵の事は知りたいようだ。

「生理的欲求・・・かしら。魔力を異常に取り入れた魔物は、更に沢山の魔力を吸収して強くなるうとするの。だから、人間襲って身体構成魔力を食べちゃおうとするわけ。」

「・・・身体構成魔力?なんじゃそりゃ?」

「簡単に言ってしまうと、接着剤みたいなものなのよ。細胞同士や細胞と魔力の、ね。」

「そんなものがあるの?」

いたく驚いた様子で聞き返す。葉月にも僅かに魔力が感じられるだけに、とても恐ろしく感じてしまうのだ。

「ええ、この世界では常識なのだけれど、まあ日本では魔力なんて存在しないものね。」

確かにそうだと思いつながらふと前をみると、犬が居た。しかし、いつそこに出て来たのかが分からないほど一瞬のうちに、だ。そして明らかに、異常な目をしてこちらを見ている。

とてつもなく嫌な確信があらながらも、一応葉月はミラーラを振り向く。

「もしかしてあれ？」

「あら、意外とすぐ出たわね。」

「やっぱりですか・・・」

なんでこんな心の準備も出来てない内に出て来るのよ！と心の中で愚痴ってみるが、どうやらそれで事態は好転しないらしい。魔犬はこちらに数歩歩くとすぐに走り出した。

「うわ、ちょ！早いつて！」

「そういう生き物なのよ。」

あせる葉月と裏腹に、ミラーラはゆっくりと手を前にかざす。すると、ミラーラの体の回りに、4本の氷の刃が生まれた。

「すこし反省しなきゃね、駄犬。」

「え？」

ミラーラが呟いたと同時に、魔犬は氷刀に貫かれていた。

すると魔犬は「キャン！」と鳴きながら倒れ、そのまま消失してしまっただ。

横で何もせずにつっ立っていただけの葉月は、呆然とした様子で消えて行く様を眺めていた。だが、それだけではないようだ。

「・・・駄犬？」

「・・・」

お約束です。(後書き)

ミラーラのドS疑惑・・・

どうしよう、このままだと王都に着くだけであと6話くらい使いそ
うだ・・・

全然話が終わる気配がしないぜorz

勉強がヤバいのになあ・・・

フラグイベント？

最初に魔物に遭遇してから半日後、無事何事もなく大きく整備された道に辿り着いた葉月とミラーラは、ひとまず宿を探すことにした。

王都へ向かう道と言うだけあり、周囲にはまばらだが沢山の人が居た。

「私がこの世界に来たあの場所って所謂田舎な場所なんですよ？なんでこんな人が沢山居るの？」

「別に田舎だから人が居ないなんて事はないわ。ただ王都から遠いから田舎と言うだけで、実際王都に集まっている人口はそこまでないもの。」

この世界にある街には格差はなく、王都もただ政治や商いを司る機関が集まっているだけで働き口もそんなに多くない。むしろその他の所謂田舎の方が農業や手工業など仕事がある。

「それにしても、やっぱりみんな小さいよね・・・」

「確かに日本人よりみんなの平均身長は低いわ。けれど、此方ではこれが普通なのよ？」

「うん、分かってはいるんだけどなんだか落ち着かないなあって思

つてぞ。」

ミラーラの身長よりも30cmは大きい葉月（といっても168cmなのだが）は、周りより頭1つほど高い。すると自然と目立ってしまう。

「あとさ・・・」

「どうしたの？」

「いや、なんでみんなして髪の色が銀だったり金だったりするのかな？」

「さあ・・・そんな事聞かれてもそういうものだからとしか答えられないわ。」

「まあそれもそっか。」

そう、葉月は髪を染めているわけでも無いので普通に黒い髪だ。長さもほぼ腰までで、前髪は目より少し上の方ではつつん切り（本人談）している。つまり、お嬢様なイメージの髪型である。

それにくらべて、この世界の人々は金か銀の髪で大体がショートカットなので、葉月はより一層目立っていた。

しばらく歩くと、一際明るい建物が現れた。どうやら、ここがそ

の宿らしい。『休憩所』という看板が立っていた。

「まあ取り敢えず今日は日が暮れる前に宿に入りましょう。」

「え、でも私お金無いよ?」

「私を誰だと思ってるの?」

迷う事無くスタスタと宿の入り口に入っていくミラーラに、少し戸惑いながらもついて行く。

すると、既に話を付けたらしいミラーラが、鍵を持って待っていた。

「全く、なんでこんなとこに限って混んでいるのかしら。」

「あれ、宿取れたんでしょ?」

「ええ。但し相部屋に限る。」

「なん…だと!?!」

(つまり、そう。これはフラグ!?!やべえ…こんな早く美少女と同衾とは…)

「ねえ、葉月。貴女今キャラ崩壊してるわよ？」

「気にしないで。私は気にしないから。」

「一緒に居る私が気になるのだからやめてって。」

なんだかんだ言いつつもミラーラは楽しそうに笑っていた。

「ねえ、一緒に部屋ってさ……ベッドは？」

「一つね。」

(k t k r w w)

「貴女本当に葉月かしら？」

「なにをおっしゃいますかミラーラさん。いくら私が美少女スキでも、一緒にベッドで寝るなんて最高ですとも！」

「……本当に大丈夫かしら？言ってる意味がバラバラすぎるわ。」

呆れ口調のミラーラは、そのまま階段を登って宿の二階に移動する。葉月もガチガチ緊張気味に後に続いた。

宿の中は日本のホテルと大差ない程に綺麗で広く、落ち着いた雰囲気だ。そして、部屋に入ると、やはり普通のビジネスホテルの様な設備が充実していて、葉月は感嘆していた。

「インフラ整ってるっていつでも、まさかここまでするとはね。凄い技術ねえ・・・」

「あら、曲がりなりにも日本の様子を見られる世界よ？この位参考にするのは普通じゃない。もっとも、だからこそ車とかは無いのだからね。」

言いつつミラーは服を脱ぎ始める。その様子を見た瞬間にビクッとして真っ赤になった葉月。

「あー・・・お姉さま。なんでお召し物を御脱ぎになられてるの？」

「シャワー浴びようかと思って。」

「宿に入った瞬間にもうやるの!？」

「貴女はさつきから何か勘違いしているわよね・・・汗かいちゃったから汗流すだけよ。」

流石にミラーラも白い眼で葉月を見る。だが、葉月にとってはむしろ最高だ。そして遂にミラーラが服を脱ぎ終わった瞬間に、鼻から愛を垂れ流して倒れた。

「ちょっと、本当に大丈夫？」

しかし葉月は満足げに微笑んだまま、ミラーラを見る。

「ねえお姉さま。」

「何よ？」

「やっぱり私お姉さまの事好きかも。」

フラゲイベント？（後書き）

葉月までキャラ崩壊が…

フラグブレイク！（前書き）

遅くなりました…

なんか眠い頭で書いてるのでだいぶ変かも…

フラグブレイク！

「ここはこんなに治安が悪いの？」

「いえ、そんなことはないと思うのだけれど・・・」

葉月とミラーラはお互いに横を見る形で話している。しかし、二人とも後ろで両手と足をロープのようなもので拘束される形で、床に仰向けに倒れる形だ。

そう、二人は今宿の部屋の中で拘束されていた。

三人の全身黒づくめの男一（？）が葉月とミラーラの宿泊している部屋に押し入ったのは、丁度葉月がシャワーを浴び終わった後だった。

夕食をどうするかについて話し合っていた時、突然扉が開けられ瞬く間に二人の足元から木の床と同じ色をしたロープが二人を拘束した。

「キャッ！」「いやっ！！」

ミラーラは扉の向こう側に魔術で反撃をしようとしたのだろうが、

扉に向けた手からは何も発生しない。そうこうしているうちに、更にロープが生まれて二人を拘束してゆく。

「ちょ、乙女に何てことするのよ!」

「誰が乙女よ、誰が・・・」

「てかなんでミラーラはそんなに落ち着いてるのよ!」

「だって、ね。この程度の雑魚ならどうとでも出来るでしょう?」

「誰が雑魚じゃ、ぼけえ!」

ミラーラの一言に、最初に部屋に入ってきた男が怒鳴った。葉月はブルブル震えながら必死にもがく。

「なんで相手怒らせてんのよ!??」

「いえ、ね。大丈夫よ。」

.....

・・・という流れで、かれこれ30分ほど拘束されていたのだ。

「という流れじゃないわよ！ミラーラ、なんとかなるんじゃないの？」

「まあ大丈夫よ、あと少し待ちなさい。」

こそそと二人で話していると、見回りから戻ってきた男の一人がゲヘヘ、といやらしい顔で笑う。

「兄貴、コイツらどうやって頂いちゃいますか？」

ヒツ、とミラーラが怯えるが、それを無視して兄貴と呼ばれた最初に部屋に入ってきた男が平然と答える。

「ムカつくやつらだが、コイツはあの巫女様だぞ？交渉材料には丁度良いだろう。」

「交渉て・・・教団とですか！？さっすが兄貴、考え方が普通と違うぜ！そこに痺れるあこが」

「馬鹿言っていないでサツサと電話の準備しろ！」

リーダー格の男は、脇の二人の手下達に怒鳴るとそのまま部屋を出て行くこうとする。

しかし、いつの間にか部屋の扉は閉まっていて、そこには赤髪のショートカットの少女が立っていた。

「ミラーラにこんな事するなんて・・・なんてうらやま...」ほん、もといなんて非常識な！」

「げっ！お前はまさか・・・炎の巫女・ファラ！」

なにやら犯人が焦っているが、葉月には何がどうなっているのかさっぱり分からず、ただ巫女という単語に反応してミラーラを仰ぎ見る。ミラーラは少し引きつった笑みを浮かべながらも良かった、と呟いた。

ファラと呼ばれた赤髪の少女は、ニヤリと不吉な笑みを浮かべて犯人を睨む。

「説明的台詞有難う、犯人さん。まあ取り敢えず、消えなさい。」

そして、一言と共に犯人3人はいきなり全身燃え上がりだした。

「「「うわあ！！??」「」「」

理解不能な現象に一瞬反応が遅れながらも、ふと互いの炎を見た瞬間に叫び慌てながら窓から逃げて行った。

「あー、ここ4階だけど大丈夫かな？」

「いや、貴女がそこにいたら窓からしか出られないじゃない。」

ミラーラは笑いながらファラに突っ込む。

その様子をじー、と見ながら葉月はファラに尋ねた。

「誰？」

寝取られ？

「初めまして、炎の巫女、ファアラと言います。」

「どうも・・・」

その後、取り敢えずロープを切って助け出してくれたファアラと呼ばれた女の子と挨拶をしたわけだが、どうしてもかミラーラは少しファアラを避けているようだった。

「ところでミラーラ、さっき大丈夫って言ったのはファアラが来ることが分かったからなの？」

「・・・ええ、そうとも言えるし、違うとも言えるわ。」

「え？」

「兎に角寝ましよう？なんだか疲れたわ・・・」

「うん・・・？」

なにやら不吉な事を言うミラーラを、不思議そうな目で見つめる葉月だった。

.....

もぞもぞと動く感じがする。一体何が起きているのか分からないが、寝る前にも嫌なことがあったばかりだし、嫌な予感しかしない。そう、まるで・・・何か大切なものでも無くしそうなほどの。

「何なのよ全く・・・」

しばらく我慢していたけど、やっぱり無理！気持ち悪いし！

「おねえさまぁ・・・」

「!?!?!?」

今変な声聞こえた!・・・ってあれ?・・・ファラ?

・・・そういうことが。

「ふっ・・・私の処女を奪うのは100年早いわ!」

バサッ!と一気に掛け布団をはがす。果たしてそこには、やはり

ファアラがいた。

「・・・」

全裸で。

side out

ファアラは、葉月とミラーラの前で土下座している。

・・・その後、取り敢えずファアラの腹に蹴りを入れて起こした葉月は、ついでにミラーラを普通に起こして”どうするか”を話し合った。その時のミラーラの表情は、やっぱりと言う感じで、怒りつつも苦笑していた。

ファアラは、私が好きだ。それも、病的な程に（勿論二人とも女だが、この国では同性婚は普通だ）。

幼い頃から一国の巫女と成るべく育てられた私達だし、数回巫女としての仕事で会っただけで、すぐに仲良くなったわ。似たような立場同士で気が合ったのじゃないね。

それからは何度も一緒に仕事をし、私としては友情を深めたつも

りだったのだけれど、ファラは昔からデートと言っていた。だが、少なくとも私は、悪さをする賊狩りや、魔物討伐はデートとは言わない。

何を間違って私なんか好きになったのやら・・・

.....

ミラーラの独白を聞いていると、隣のファラは驚いたり泣いたり嬉しがったりと表情をコロコロと変えて、それがボーイッシュな髪とよく似合う・・・いや、髪が似合うのか、と結構どうでも良いことを考えていた。

.....

次の日の朝に荷物を纏めていると、ファラが毛布でぐるぐる巻きにされた状態にも関わらず、ピョコピョコとバランスを取りながら部屋に入ってきた（昨日の罰は、ミラーラと葉月二人がかりで毛布にぐるぐる巻きにしてロープで縛って廊下に放置というものだった）。

「おっはよー！」

「うん、おはよー。」「あー、おはよー。」

結構みんな軽いものである。

「今日はもうここを出て王都に向かうんでしょ？」

「ええ、そのつもりよ？」

するとファラは、人懐っこい笑みを浮かべて元気に言い放った。

「よし、ならアタシもついてってあげる！」

「いや、別にいいわ。」

「ひどっ!?!？」

「だってファラ、ずっと私の寝込みを襲おうとするんだもの。」

「うう……昨日間違っ葉月のベッドに潜り込まなければ今頃は
お姉様は私のものなのに……」

「お姉様って……」

展開が目まぐるしくついていけない葉月だったが、どんどん
会話が酷い方へ流れているのは感じた。

「その呼び方やめてよ。ハズカシイでしょ？」

「うう……つれてつてくれなきゃ次の巫女会議の時もお姉様って呼ぶもん！」

「……」

するとミラーラはゆっくりとした動作で自分のカバン（四角い革製）を、スツ…とファラの足の小指に落とした。

「つつつ！？！？」

「いったぁー」

見てるだけで足に痛みが移りそうだ。ファラはびよんびよんと跳ねながら「イタイイタイ！」と言っていたが、ミラーラはそれを意に介さず荷物を纏め上げ葉月を向いた。

「取り敢えず、行きましようか。」

「………いいの、これ？」

勿論、これとはファラの事だ。

「いいんじゃない？これでも喜んでるし。」

「・・・確かに、ファラは「いたいー！」と言いつつながらも楽しそうに笑っていた。」

「・・・Mだ。真のMだ。」

番外編：清白葉月の日常 ？（前書き）

PV10000突破記念！

本当にこんな駄文に付き合っ
て下さる方が沢山居て、
ここまで来れました。

本当ありがとうございます。

まあまだまだ10000とい
うのは少ない気がしますが、
是非これからも宜しくお願
いします。

番外編：清白葉月の日常 ？

私こと清白葉月は、一応高校三年生だ。実家の道場のこともあるから、家の用事で何回学校を休んでも公欠扱いなので卒業とかには響かないというなかなか粋な計らいをされている身分だったりする。それほどには家の道場は名が売れているらしい（意外と自分が深く関わっているものの対外的な評価などは本人達には分からないものだ）。

私の通っている高校は、私立ながらもまあまあ進学校だ。一応毎年T大やK大などに何人も（何十人とまではいかない）送り出しているらしい。

けれど、私はスポ薦で高校に来たので、そこまで勉強が出来る訳でもない。精々行って中の上、普段は中の下だ。

だから、将来の夢とかは特に何も考えてないし、行きたい大学とかも特に無いから意外と気楽な高校生活を満喫している。

「まあどのみち道場継ぐと思うけどね。」

何回か海外でアーチェリー大会に出場したりして、既にどこそこから留学のお誘いも受けてるけど、英語できないし別に良いかなと思っただり。

「因みに私の学年には、何かしらの天才ってのが山ほど居るんだよ

ね。」

例えば演劇の天才。まあぶっちゃけて言ってしまうと昔は子役をやっついて、今は修行中って子。例えば書道の天才。既に書家としての堅苦しいような厨二くさいような二つ名を持つてるやつとか。まあこの子は私の幼なじみなんだけど。

あー、でも勘違いしないでほしい。ここは女子高だ。そして私のパラダイス。

「自分で言うのもなんだけど。」

私はプロポーションが良い。それはもう、グラビアアイドルにでもなれるんじゃないかってくらい。まあ一応謙遜しておくけど、グラビアアイドルになろうとも思わないし、例えスカウトとかされても他人と比べられると必ず見劣りするはずなので実際にはなるつもりは無いのだが。

つまり何が言いたいかと言うと、同性受けが良い顔と体をしているということだ。武道を究めている人間として良い感じに筋肉はついているし、おかげで姿勢は良い。そして、普段はセミロングの髪をポニーテールに纏めているので、袴を着るとまるでプロのコスプレイヤーかのような見栄えになる（勿論こっちにそんな意図は無い。ただの正装だ。）。

いつの間にやら私のファンクラブが出来ていてめちゃくちゃびっくりしたものだ。

「それに。」

私は正直、あまり男の人に興味は無い。というのも、初恋は一郎おじさんであり（それは叶わぬ恋なのは分かっているに諦めているのだが）、一郎おじさんを超える男性に未だ会った事がないし、おそらくこれからも無いだろうからだ。

そして、むしろ可愛い女の子を見ている方が楽しい・・・いや、満たされる感じがするからね。

大体、女子高になると結構百合な子って居たりするんだ。かくいう私もその一人だし、私自身何度か告白された事もある。

・・・前置きが長くなっただけどこから本題。

そんな私がある日とある女の子から告白された時のお話。

.....

呼び出されたのは、学校の屋上。普段は立ち入り禁止だけど、部活で使う人（主に吹奏楽部）が居るとあけてもらえる場所だ。まあ勿論今屋上には誰も居ないんだけど。部活動生は誰も居なかったから、おそらく相手の子が手回したんだろう。

「そつれにしても今時下駄箱に置き手紙+屋上とはねえ。」

少し早く来すぎたかも知れない。予定の30分前だ。相手の名前も書いてなかったから連絡の取りようもないし……

そう思いながら外の景色を眺めていると、扉がギィ……という重い音を立てて開いた。そこから出てきたのは……

「あまね!?!」

沢村天音。又の名を、沢村清龍。幼なじみの天才書道家だ。

「え……手紙くれたのつて天音だったの?」

「むー、そんなに意外かなあ……」

まさか幼なじみにこんな手紙を貰う(別にラブレターと決まっている訳ではないが)なんて!

「まあそれで話ってなに?」

「うん……あの、ね。」

何やら落ち着かない様子で顔を赤らめながら何かしらを言いかけては止めていた。

それを3回ほど繰り返したあとに、ポツポツと言い始めた。

「あの・・・私と、付き合って欲しいの。」

「・・・」

キタ（・・）　！！！！！！

幼なじみに告白されるシチュとはリア充も真っ青ダネ！

とか思っただけにやにやしていると、慌てたように両手をぱたぱたと顔の前で振って否定した。

「いや、ほんとに付き合う訳じゃなくて、カモフラージュの為なの」
「！」

・・・まあ、そんなもんだよね人生なんて。

っと、気を取り直して・・・

「うーん、というと、誰かにストーカー紛いの告白でもされてて、それ断るためってこと？」

「そう！さすが葉月、話が早くて助かるわあ！」

「だが断る！」

「ええ！？」

「いや冗談、ちょっと試してみたい台詞第12位だったから。」

「う・・・うん、てことはやってくれる？」

ここでまあ所謂選択肢な訳だ。さあて、どうしたものか・・・

1 ・断る

2 ・恋人のフリをする

3 ・食べる

・・・うん、迷わず3だよネ！

「じゃあ、偽りの恋人じゃなくて、本物の恋人だったらやってあげ

る。」

そういうと、天音はまた一気に顔を真っ赤にしていやいやいやと顔を思い切り横に振った。

・・・ちよつとシヨック。

「私達女だよ!?!」

「それがいいんだよ(笑)」

「!?!?!」

さすがに引かれた。

「まあ冗談。そのくらいならやっただげるよ。それに、私に頼んだって事はストーカーは女の子って事でしょ?」

すると、コクンと小さく頷いた。天音は突っ込みも凄いが照れた顔も可愛い子なのだ。思わずにやにやしそうになるのを必死に抑える。

「それで・・・何時ストーカーされてるの?」

「家に居るときとか学校が無いときはいつつもケータイとか家の電話にかかってくるんだよね・・・」

「うわぁ。」

「そりゃ筋金入りの好き者だねえ。」

「なんか私の扱い酷くない・・・？」

「気のせい気のせい。」

まあそんな子を諦めさせるのは確かに彼女を作るってのも有効だろっね。

「よっし、じゃあ取り敢えずしばらく一緒にすごそうか。」

「うん、お願いね。」

「・・・」

「やば、今報酬は体で、とか下らないこと言いかけた（笑）」

「さあて、どっちやってその子を私のものにするかな？」

番外編：清白葉月の日常　？（後書き）

突破記念の番外編なのに「続く」にしてしまったorz

まあまた20000超えたら続き書きます（笑）

ああ嘘です殴らないで！（泣）

番外編：清白葉月の日常 ？

天音と同居してから4日が経った。つまり今金曜日。天音は寮生活で一人部屋なので、私としては気が楽というものだ。

今日も学校と一緒に行く。平日なので私の道場も無いし、外泊だって両親は事情説明したら納得してくれたから、門下生の稽古のある土日以外はいつでも一緒に居られる。逆を返すと、今日までしか一緒に居られないのだ。

「そういえば、その相手の子って、天音とどんな関係？」

なんだかんだで聞いてなかった事をふと気になって聞いてみる。

「いちおう部活の後輩なの。」

ああ、勿論天音の所属する部は書道部だ。

「いちおう？」

「えっと・・・その子、幽霊部員なのよ。」

それでなんで会う機会があったのだろうか？

聞いてみると、意外と単純なものだった。

なんでも、幽霊部員でもなんでも絶対参加しないといけない集会在二ヶ月に一回あるらしく、そこで一目惚れされたらしい。

「そして、何度か付きまとわれて遂に告白された。」

「うん・・・流石に私も、そんな面識無い子と付き合うつもりないしね。」

「・・・つまり面識あれば女の子でもOKってこと？」

「なら私のやる気も俄然上がって上がって上がりまくるのだけど」
笑)

「いやいやいや、女の子って！まだ私はノーマルだよっ！」

「ふうん？」

まだってことは今から変わる可能性大ってことだよな？（笑）

よっしゃ、ちょいやる気ゲージ回復ww

「ま、取り敢えず今日までは普通に学校行って様子見ましようか。」

「うん、そだね。」

.....

というわけで、なんとか間に合いました。

木曜日の放課後に、天音の下駄箱にラブレターが入ってた。”金曜日の放課後中庭で待ってます”だってさ。これはあれだね、私の姿を確認して早くしないとって思ったんだね。

健気で良い子じゃん（笑）

「いちおう私もついて行くけど、基本介入しないつもりなのでヨロ。」

「うん、分かった。アリガト、葉月。」

やば、かわいい（ry

とか雑談しながら中庭に向かう。中庭へ出る扉の所までつくど、私はその横のほうに背もたれて待機。ここから先は天音自身の問題だもんね。

・・・どうやらその後輩の子が来たみたいだ。「お呼びだてし・・・ないで・・・」とかかすれがすれ聞こえる。

暫くそうしていると、ちよつとずつ声が大きくなってるのかある程度聞こえてきた。

「・・・からあ、葉月と・・・なんじゃ・・・」

「なら先輩は・・・の子と一緒に・・・るんですかつ！」

うーん、なーんか拗れそうな予感・・・てか確実にこれダメだよ

ねえ。

とか思っているとな音が帰ってきた。

・・・背中にその子連れ。

.....

「なんか葉月の事が知りたいから暫く一緒に暮らしたいって言ってるんだけど・・・どうしよう?」

そつきたか!ww

「・・・いいんじゃない?天音の家に一緒についてことでしょ?」

「私としては流石に3人は遠慮したいんだけどね・・・」

「あら、いいじゃない?滅るもんでもなし。」

そこでその子を見て、先に宣戦布告しておく。

「私は清白葉月、天音と恋仲なの 貴女の名前は?」

一瞬グツとその子は唇を噛み締めて、しかしこちらを睨み付けるように言った。

「私は神原奈美！将来天音先輩と結婚するの！！」

「なる程、ナオナオか。」

「いきなり変なあだ名つけないでよっ！」

「んじゃあなおっち。」

「それは天音先輩だけが呼んで良いの！」

「贅沢だなあ…てか私も先輩だぞ？敬語くらい使いなさい。」

「さっさとお消えになりやがって下さい。」

ナオナオは、なんと金髪ツインテ釣り目という、めちゃくちゃツンデレ王道キアラだった。中身も外見と同じだ（笑）
因みに胸は控えめ。

「はっ、今何か葉月先輩から邪なオーラがっ！」

「失礼ねえ、別に取って食いはしないわよ？」

今は、ね（笑）

番外編：清白葉月の日常 ？（後書き）

・・・はい、後一話続きますww

あ、やめ、生卵は後がめんどろだからなげちゃだめえー！

番外編：清白葉月の日常 ？（前書き）

なんか、清白葉月の日常 ？のとき言ってた20000PV…いつの間に行ってた。

びっくりしたー（笑）

という訳でお久しぶりです&短くてごめんなさい。

まあこの番外編は今回で終わります。

とりあえず続きはあとがきでノシ

番外編：清白葉月の日常？

ナオナオが、消えた。

.....

あの告白の日以来、本当に天音の部屋で3人で暮らし始めた私たちは意外と息が合った（と私は思う）。

学校に行くにも、遊びに行くにも、買い物に行くにも三人で行き、ナオナオと私はどちらが天音をより喜ばせられるかを基準に争い合った。

三人で馬鹿みたいに過ごす時間が楽しかった。なのに、ナオナオは、違ったのだろうか。

.....

「.....」

私と天音は、警察署からの帰り道何となく家に帰る気にならず、ファミレスに立ち寄った。

最後まで一緒に居た人物として色々聞かれたが、正直警察の人と話すのがつらかったからだと思う。

「ナオは死んでないもん・・・」

「うん、私もそう思うよ。もうちょいしたら、『驚いたー？』とか言いながら出て来るんだよ・・・」

そういう私も、震える声を抑えるのに必死だったことは天音には内緒だ。ちゃんと出来たかはわからないけど。

二人して無言で紅茶を飲みながら、私はふと、ナオナオが消える日の直前に言っていた事を思い出した。

「そついでば、ね。」

「？」

「ナオナオがこの前言ってたんだけど、この世界に魔法があれば良いのにつて。どういう意味だったんだろう?」

「魔法かあ…」

グラスをテーブルの上に起きながらストローを使ってずそぞと紅茶を飲みながら、天音が答えた。

「やっぱさ、ナオにも何か、深刻な、叶えたい事があつたんだよ。」

「そのせいでどこか行っちゃったって事?」

「さあ…そこまではなんとも。むしろ、葉月の前でそんな事言ったらんなら、葉月の分かるんじゃない?」

「分かってたらこんな風に言わないわよ。」

「だよー……」

二人してなんとも言えない雰囲気、それでもとりあえず話さないといけない気がしてそのまま二時間ほど口を開き続けた。

結局、1ヶ月経っても、2ヶ月経ってもナオナオは姿を表さなかった。

学校や警察の方では、何かしらの事件に巻き込まれて居ると判断したらしく、まだしっかり捜索が続けられている。

ナオナオが居なくなってから3ヶ月後の事、天音は高校を中退し

た。

別に、今回の事件がなにか関係あるわけではない。ただ単純に、書道の修行の為に高名な書家の弟子になるそうだ。

それでもやはり気にしていたのは、未だ手掛かり一つ見つけれ
ていないナオナオの行方だった。

そして、私は天音の分までナオナオを探す事にしたんだ。まあ、
それでも私には大した事なんて出来ないけれど。

たまに街中で、キョロキョロするだけでも探すことは可能なんだ
し。

・・・別に呑気なわけじゃない。ただ、私には、ナオナオは元氣
にしているという感じがしていたんだ。

そして、ずっと心に残っていたのは、消える直前に言っていた言葉だったんだ。

番外編：清白葉月の日常 ？（後書き）

はい、如何だったでしょう。

まあ、ですよねー。

分けてわかんないですよねー。

と言っわけで、このお話のプチ解説を。

うん。特に無いかな。

あ、ちよっ！まっ！今やるからっ！

・・・ゴホンッ、さて、ナオナオは今回だけのかませいぬ的なにかではありません。ちゃんと本編にも絡んできます。

まあそのための伏線を張る為のお話と言うことですNE

というか、勘の良い人なら既にナオナオがどんな位置付けに在るのか薄々気が付いてくれているのでは？という淡い期待を込めつつ。

ちゃんと早めに投稿出来るようにしますー（笑）

たどり着きました。

ミラーラとファラという二人の巫女を引き連れながら歩く葉月はやはり王都の人達にとっては衝撃的だったらしく、一行が王都に着いて二日目には既に様々な憶測が街中に飛び交っていた。

曰く、葉月は巫女に実力を認められた新たな王である。

曰く、葉月は実は王の隠し子であり、巫女達が密かにその身をお守りしていた。

曰く、葉月は他国からの使者で、秘密裏に条約を交わしに来た。

曰く、葉月の”テク”に巫女二人が陥落するほどの”者”だった。
(自主規制)

等々、全く根も葉もないものばかりではあったが、大筋では間違っても無いのが困りものだった。勿論最後のは断じて違うのだが。

「困ったものねえ。これじゃあ街中で買い物も出来ないわ。」

「うう…なんかほんとごめんなさい。」

ミラーラの呟きに、葉月は萎縮しながら応える。葉月にも、この状況は嫌だなあと思いながらも自分の正体を明かす訳にもいかず、もどかしいのだ。

というのも、異世界…つまり地球から使者（救世主）が来ることは前巫女が既に予知して全国民に知らせていたので、正体を怪しまれる訳では無いのだが、ただの学生だった（弓の師範をしても、だ）葉月には、まだ人前で自分が救世主であるとは堂々と言う気になれないからだ。変に期待されても、自分が何をすべきなのかがまだ分からない。

「いえ…貴女のせいでは無いのだけれどね。」

その気持ちをすっかり解っているミラーラとファラは、しかしこのままでも良くないと思っっているからこそ今の様な発言が有ったのだが、やはりまだ酷か、といった心情の方が強かった。

遡ること一日前、葉月一行は王都・と言つても下町だが・入りした。ミラーラとファラは王都出身だが、それでも下町に来たことは無いらしく、三人とも珍しがって屋台などを見て回った。

しかしそれが災いし、街中の人々に強烈な印象を与えたらしい。周りと比べて異常に高い背の葉月が、各国の代表ほどの実力と権力と財力を持つ巫女を二人も連れて歩いているのだ。これが目立たない道理は無い。

王都は円形になっている。一番外には5メートルはあるだろう厚い壁、その中に下町、貴族街、王城と、波紋の様になっているのだ。その三区画を区切るのは、流れている川だった。跳ね橋を架けなければ、行き来する事は出来ない。

下町と貴族街の境の川には幾つもの橋が架かっていて、それほど不便はないのだが、やはり王城と貴族街を隔てる川に架かる橋はなかなか無い。四本十字を描く様に用意されていて、しかしそれは常に架かつてはいない状態だ。

そして今一行が居るのが下町の中に建てられた王族や国賓用の最高級ホテルだ。そこに葉月も一緒に泊まった事が噂の拡大解釈に役買っていたのだが、そこまで三人とも考えが及ばないほどに疲れていた。外は既にオレンジの光を放つ太陽（だと思つ）が地平線の下へと沈みそうになっていた。

「水の都、アーカムへようこそ…ねえ。」

「どうしたの葉月？」

「いや、王都って言うからもっと規模の大きい街かと思ったけど、なんか…自然が一杯だね。」

城壁や街を囲む円形の壁は、全て水が流れている。一見、人工的な滝の様な印象を受けるほどだ。

そして、王城の周りには下町からでも見えるほどの大木が何本も立っている。

王都と聞いて日本でいう東京の様な、しかし文明的には中世ヨーロッパの様な二つを足して二で割ったイメージを持っていた葉月にとってみれば、だいぶイメージと違うのだろう。

「私にとってはこれが普通なのだけれどね。」

苦笑しつつ、欠伸を噛み殺した様な（実際そうだが）顔のまま、ミラーラは手紙を書く。どうやら、アーカムの王に詳細を知らせて橋を渡して貰うようだ。

「それじゃ、お買い物は諦めて明日王城入りかな？」

「そうなるわね。・・・ファラは来なくても大丈夫なのよ？」

ミラーラのベッドに潜りながら尋ねたファラに対して、ミラーラは腐った魚を見るような目を向けていた。

「いやいやいや。他国の巫女が曲がりなりにも付き添いだけだったとはいえ挨拶無しに帰っちゃまずいっしょ。」

対するファラは、その視線を浴びてやけに恍惚とした表情をしながらの返答だったので、マトモな返答でもマトモに聞こえなかった。

「んー…分かったわ。とりあえずその事も手紙に書いておく。」

その様子を見て、ミラーラは今にもため息をつきそうな表情でまゆをしかめて頭を横に何度か振り、ファラを無視をする事に決めたようだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7206k/>

神威

2010年10月9日18時45分発行